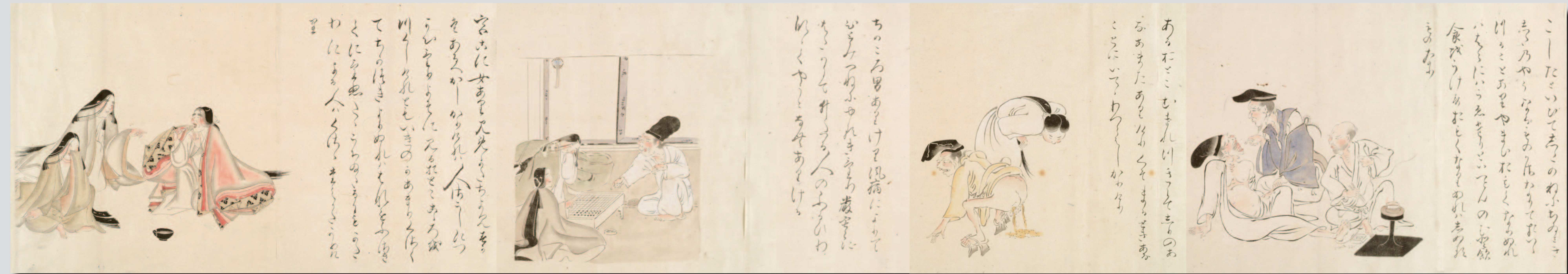


# やまいのそうし 「疾草紙」に見る平安時代の病氣

「疾草紙」に描かれた17種類の絵のうち、病氣に関する12種類を紹介します。



口臭のひどい女性が楊枝を手に持ち歯を磨いている。その脇では他の女性が袂で口を押さえて臭いをかがないようにしている。

常に腫が動く眼振(がんしん)と、体が震える症状の男性が描かれている。

肛門が2つあると書かれており、痔ではないかといわれている。

舌の裏側が腫れてもう1枚舌があるようにみえるものは、「小舌(こした)」と呼ばれた。現在、「がま腫」と呼ばれる病氣である。



腰を曲げたまま歩いている老法師は、くる病ではないかといわれている。

性行為により毛虱(けじらみ)をうつされた男性が、かゆくてたまらず陰毛を剃っている様子が描かれている。

食事中、歯の痛みを訴えている男性は歯槽膿漏(しそうのうろう)と思われる。

居眠りをする男性が描かれている。過労により眠ってしまうのか、他の病氣によるものかは不明。



「霍乱(かくらん;急性の胃腸炎)」のために、口から吐き、同時に下痢をしている様子が描かれている。

医師が目の手術を行っている様子が描かれている。白内障の手術は、平安時代の医学書『医心方』にも書かれている。

すやすやと寝入っている他の女性たちと対照的に、不眠症に苦しむ女性が描かれている。

顔にあざのある女性が苦しんでいる様子が描かれている。